

碧水／安得同一致／然此海客心／還應無有愧

## 「熊升樹」の「升」について

大山 潔はら

「霜落熊升樹」という一句を読んだ時には不思議な感じがした。それは驚きと共に何かフワフワとした印象を受けたのだ。驚きは恐らく熊は獯猛な動物だという認識から生まれたものであろう。フワフワした感じは「升」の字によるものではないかと考えたが、熊を恐ろしいと思いつながら何故フワフワの感じがあり得るのだろうか。この不思議な印象を切つ掛けとして、「升」について考えてみることにした。

「熊升樹」とは熊が木にノボルことであるが、「攀」「登」「上」等もノボルの意味を持っているので、先ずこれらの語について考えることにした<sup>(1)</sup>。従来熊に対しては、獯猛な野獣というイメージがあり、中でも特徴とされるのは力強い掌と手足の鋭い爪である。もしも「攀」を使うとすれば、文字の形に手が描かれているだけでなく、そのノボリは「しがみついて這い上がる」という手足の動きが伴うノボリであり、更に「攀」にはノボルという語意のほか、手でつかまる、しがみつくな<sup>(2)</sup>などの用法も存在するため、(獯猛な熊のシンボルである)熊掌と爪への連想は必至である。これは『魯山山行』に漂う幽静、超逸の境地と釣り合わないだけでなく、それを壊してしまうことさえ予測できる。

「登」の字形にも両足で歩くことを意味する<sup>はつ</sup>が含まれるが、「攀」に含まれる「手」ほどには意識されていないかも知れない。また、「登」には「登天」「登仙」のような用法もあり、この場合足の動きは全く感じられない。しかし「登」には「足で踏む」<sup>(4)</sup>などの用法が存在し、「登攀」「攀登」という熟語もある。「登」によって表現される木登

りには、やはり熊の足の動きが連想される可能性があるだろう。

「上」には手足を連想させる象形的要素が含まれず、また「上天（天に昇る）」のように、手足の動きを連想させないノボリの用法が存在する点において「升」と同じである。では、何故「上」が選ばれなかったのだろうか。先ず平仄の問題が考えられる。本詩の平仄は次のようになっていいる。(○＝平声；●＝仄声)

●●○○○○●●○○○○●●

適與野情愜，千山高復低。

●●○○●●●●○○●●○○

好峰随处改，幽径独行迷。

○○○○○○●●○○○○●●

霜落熊升樹，林空鹿飲溪。

○○●●●●○○●●●○○○

人家在何許，雲外一声鷄。

五言律詩には一句の中で第二、第四字目の平仄が反対になるという「二四不同」の原則がある。また、二つの聯の間では、前の聯の後句と後の聯の前句の二、四言の平仄が同じになるという原則もある。したがって、第五句の第四字目は平声でなくてはならない。それが「上」ではなく「升」が選ばれた理由の一つとして考えられる。しかし、音韻の問題よりもっと根本的な原因が存在するのではないか。それは「上」にはノボルの意味以外に「前進する」<sup>(5)</sup>などの用法もあることである。たとえ間接的であっても、足の動きを連想させる可能性が残されるのではないだろうか。

「升」には手足を連想させる象形的な要素はない。これは「上」と同じである。また「升天」「升仙」の用法があるのは「登」とも一致する。しかし、「升」はほかの諸表現と異なる特徴を持っている。先ずノボルという語意以外に、

直接的或いは間接的に手足の動きを連想させる用法が殆どない点である。一方「升」の最も一般的な用法は「日升」「月升」である。それは細部の動きが一切観察されず、ゆっくり静かに上昇するノボリであり、しかも人々は常にそれを目にし、それを言葉にするノボリである。<sup>(6)</sup>このためだろうか、「升」という文字によつて私の脳裏には、手足の動きが全く見えない丸々とした熊が、ゆっくり静かに木をのぼっている、いや、上昇しているというシーンが目につく。これこそこの一句を最初に読んだ時に感じたフワフワの本質ではないかと思われる。

ここでもう一度熊が現れた第三聯「霜落熊升樹、林空鹿飲溪」を見てみたい。霜が降りて辺りは白く空気がヒンヤリとしている中、丸々とした一つのかたまりのように見える熊がゆっくり静かに木をのぼっている。このシーンと対をなし、葉の落ちた人気がない林を背景に、鹿が山間に流れる小川の水を飲んでゐる。すべてのものが、凶暴な熊さえも例外ではなく、この深遠静寂の安らかな境地に溶け込んでゐるように感じられる。

唐代までの詩には動物などが木に登るといふ描写が少なく、また熊を用い万物の調和した境地を表現する先例も見られない。<sup>(7)</sup>梅堯臣は「熊升樹」といふ表現によつて熊の獍猛な一面を最大限に封じ込め、驚きと恐怖から安らぎへ、大きな距離を一気に飛び越えることによつて、かつて例のない万物一体の境地を作り出したのではないか。梅堯臣にはほかに『和壽州宋待制九題・狎鷗亭』（壽州の宋待制の九題に和す 狎鷗亭）にも「坐熊臨碧水、安得同一致（坐する熊は碧水に臨むも、安くんぞ同<sup>(8)</sup>に一致するを得んや）」という句がある。この「坐熊」も、山中に住む恐ろしい獣、或いは勇猛な兵士に譬えられる熊の姿とは異なるものと思われる。これらのことを総合して考えると、梅堯臣は意識的に伝統的な熊のイメージと異なる熊の姿を捉えることによつて、斬新な詩境を開拓しようと試みたのではないかと考えたのである。

注

- (1) 爬をノボルの意味で使う用例は元代以前のものには見つからない。梅堯臣のいた宋代では一般的な用法ではないと考え、言及しないことにする。
- (2) 『国語・晋語八』「是行也、以藩爲軍、攀輦卽利而舍。」韋昭注：「攀、引也。」(「行ったことは藩を以て軍營とし、輦を攀き水や草の便利なところに着くと一泊することであった。」韋昭注：「攀は引くなり。」)『漢書・朱雲伝』：「雲攀殿楹。」(朱雲は宮殿の欄干にしがみついた。)
- (3) 『説文』には「𦏧、足刺𦏧也」とあり、『漢辞海』(三省堂、二〇〇〇年)によれば、「刺𦏧」は両足がちくはぐに進むさまであるという。
- (4) 北魏酈道元『水経注・穀水』「人相登躡死於壑中、及七星澗、澗爲之滿。(人々は踏みつけ合つて溝の中で死に、七星澗に至り、澗は死体で満ちた。)」
- (5) 『戦国策・秦策二』「甘茂攻宜陽、三鼓之而卒不上。」鮑彪注「上、猶前。」(甘茂は宜陽を攻めたが、太鼓を三度敲いても兵士は進まない。)鮑彪注：「上は前に進むの意。」
- (6) 「日升」「月升」の用例に関しては、『詩経』索引から小雅・天保「如月之升」、如日之升、『文選』索引から南朝宋・謝惠連「七月七日夜詠牛女詩」「落日隱欄楹、升月照簾櫳」が見付かり、また東吳中文研究所『寒泉・全唐詩全文檢索資料庫』によれば、王維「奉和聖製天長節賜宰臣歌應制」「太陽升兮照萬方、韋應物「答長寧令楊勳」「皓月升林表」など十例が見付かった。因みに、現代中国語では「太陽升」「月亮升」のほか、「气球升到天上去了」のような例が日常的に用いられている。この「升」は現代語ではあるが、その用法は筆者の理解する「熊升樹」の「升」に極めて近い。
- (7) 木登りの用例に関しては、『詩経』索引から小雅・角弓「母教猥升木」、『文選』索引から張平子「思玄賦」「鳥登木而失條」、そして上述した『寒泉』から杜甫「百憂集行」「一日上樹能千回」、『羌村』「驅鷄上樹木」、皮日休「魯望讀襄陽耆舊傳」「得作升木狄」、張謂「西亭子言懷」「攀樹玄猿呼郡吏」、白居易「題岳陽樓」「猿攀樹立啼何苦」の合計七例が見付かった。
- (8) 『和壽州宋待制九題・狎鷗亭』の全文は次の通りである。「群生自知機、不可欺以異、此雖鷗與馴、鷗亦魚所避。坐熊臨碧水、安得同一致、然此海客心、還應無有愧。」本詩は授業の中で、千葉真君によって紹介された。